

# 禅の友

—Zen no Tomo—

1

January 2022





ご本山だより  
大本山永平寺【寿餅諷経】

大本山永平寺  
☎〇七七六・六三・三一〇二



大本山永平寺での年末年始には多くの行持が修行されます。その中に正月三箇日に修行する「寿餅諷経」がございます。

年末に雲水総出で搦いたお餅は年始に諸仏・諸菩薩・祖師方にお供えし、また「寿餅」として雲水に配られます。「寿餅」とは、年始に弟子がお師匠さまに贈るお餅のことです。

お正月を迎えると、雲水は永平寺での修行中、大切にしている龍天軸を床の間に掛け、配られたお餅「寿餅」をお供えし、三箇日の毎朝に、自身のお師匠さまの法身堅固（健康）と福寿無量（長寿）を願い、「寿餅諷経」をお勤めいたします。

雲水は修行中の身にて、三箇日のお勤めが終わっても、お師匠さまの元へ直接年賀の挨拶へ伺うわけにはまいりません。

雲水たちはそれぞれに筆をとり

改歳之令辰（改歳の令辰）  
謹伸嘉悛儀（謹んで嘉悛の儀を伸ぶ）  
・  
・  
と、漢文での新年の挨拶文を添えてお師匠さまへ贈ります。

道元禪師さまは『正法眼蔵』『行持』の巻に

師はあれどもわれ参不得なるうらみあり、参ぜんとするに師不得なるかなしみあり。

とお示しです。

身近にお師匠さまが居ても、当の弟子に参学の機縁がなければうらむべきことです。

また、いざ参学の機縁を得てもその時にはすでにお師匠さまとは別れてしまっている場合もあり、誠にかなしむべきことなのです。

寿餅諷経を修行し、お師匠さまに年賀のご挨拶ができることは誠に尊く有難い修行でございます。



# ご本山だより 大本山總持寺

【人人悉く道器なり、  
日日是れ好日なり】

『伝光録』第十祖 脇尊者章

大本山總持寺

☎〇四五・五八一・六〇二二



お健やかに新年を迎えられたこと  
をお喜び申し上げます。

まずはコロナウイルス感染症の終  
息と皆さまのご健康とご多幸を心よ  
りお祈り申し上げます。

大本山總持寺では新年を迎えた午  
前零時に大梵鐘撞き初めより始まり仏  
殿での祝祷諷經・大祖堂での石附禪師  
さま御親修の元朝大祈禱が順次修さ  
れ、申し込みによる初詣祈禱、また特  
典のある特別大祈禱も七日まで行わ  
れる予定です。

五日は寒の入りとなり、通常ではこ  
の日から修行僧は鶴見の街に出て「寒  
行托鉢」を行います。が感染症の状況を  
踏まえながらの対応となります。

そうした中「冬安居」と称される

一〇〇日間の修行期間も解制（終了）  
となり首座を中心とした冬の厳しい  
修行を成し遂げた修行僧の安堵した  
表情が見られることでしょう。

標題にあります

人人悉く道器なり、日日是好日なり  
は、日々の厳しい修行こそ悟りなので  
あり、全ての修行者はその境涯に達す  
ることができるのであり、かけがえの  
ない大切な今のこの瞬間を燃焼する  
ことができたならば、その時こそがす  
ばらしい一日となることを教えた一  
言であります。

新年を迎えることができた感謝と  
喜びを思い新たな気持ちで生活した  
いものであります。

選・坊城俊樹

鼻唄の合間に木の実落ちる音

東京都 藤森 莊吉

評 なんとも愉快で余裕のある句。鼻唄を歌いながら何かの作業をしているのだろう。ふと外で「ポトンコッソ」という音が聞こえてきた。はて何の音かと思案したらそれが木の実が屋根や地面に落ちる音であると気づいた。実は案外素敵な物語かもしれない。

下校児の列伸び縮み刈田道

岐阜県 大下 雅子

評 夕方であるか、下校の子どもたちが列になって歩いて行く。それは伸びたり縮んだり。がやがやと楽しそうに家を目指している。その場所は刈田の中の道。もう刈り取られてやや褐色となった稲の根っこが見える。日本の典型的な美しい風景ではないか。

◆ せんべいを手の平で割る冬の夜 北海道 大野 節子

◆ 宿坊の煮炊きの匂ふ枯木星 大阪府 柏原 才子

◆ 隠し田は此処ぞと囲ふ彼岸花 奈良県 竹村 和成

◆ 月天心空道湖闇をもて応ふ 島根県 藤江 堯

◆ 冬桜酔ひし羅漢の蛸踊り 千葉県 長澤 きよみ

◆ 一献の盃ありて秋の月 宮城県 阿部 徳夫

◆ 小鳥来る月光色のガレの花器 長野県 森山 昌子

◆ 夕風を見下す崖のマリア像 熊本県 福島 隆子

◆ お百度を踏む人の背に紅葉降る 和歌山県 田崎 よし子

◆ この道は父へと続く曼珠沙華 大阪府 花谷 広文

選者吟

銀杏を踏みて威厳の崩れたり 俊樹

作句小見 銀杏というものはなかなか厄介なもの。踏んだりするとその臭い匂いが広がる。食べればおいしいのだが。実はこの句はかつての小学校の校庭の風景。髭をたくわえた校長先生らしき人がうっかりそれを踏んでしまった。その時のなんともいえない顔が可笑しくて。

選・長澤 ちづ

夕暮れをいきつたか庭師らが秋空広げ  
帰りて行けり

東京都 鈴木 正作

評

晩秋の日暮れは「釣瓶落とし」と喻えられるように一気に暮れてしまう。庭師たちが一日を目いっぱい働く様子が、的確にきびきびと表現されている。「いきつたか」の促音便と「秋空広げ」の喩が効果的である。

闇一閃薙ぐは伝家の竹箒息を殺して蜜取  
り出す

鳥根県 横山 豪吾

評

「伝家の宝刀」ならぬ「竹箒」であるところからユーモアがある。勇壮な上句から一転しやさしく取り出すものが、繊細な生きものの蛩と展開する一首の構成も面白い。

◆ 苦しさに代かく牛があご出せば父の険しき追ふ声ありき

三重県 西村 廣視

◆ 大津波浴びたる庭の片隅に金木犀は花を香らす

岩手県 阿部 潔子

◆ 川蟹が餌を求めて小雨降る護岸道路に姿見せたり

鳥取県 山本 浩一

◆ 時雨止み定かならざる鳥影に点滅しるし橋脚の灯は

広島県 徳永 進一郎

◆ 昼告げる鐘になだりのゆくだる右手に竹杖左手明日葉

静岡県 杉原 民子

◆ 花開く日はいつもほぼ同じ律儀者だよ背高泡立草

山口県 橋本 美知子

◆ 語りたき人みな鬼籍と氣付かされアドバイスもまた無言の空に

青森県 中田 瑞穂

◆ 千支の寅ようやく仕上げ三本の睫毛を息止め貼りて日暮るる

兵庫県 前田 あつ子

◆ 亡き母の着物広げて語りかけすてられずまた仕舞う秋の日

東京都 兼清 基子

◆ 幼少の秋の日われの遊び場所推の実の降る落葉積む路

鳥取県 眞山 博充

選者誌

はらはらと天のまはらゆ降りてくる何の樹の葉か  
しろがねの音

ちづ

作歌小見

家畜の牛と一体になって農作業をする父の姿を詠う西村さん、かつての労働の厳しさが伝わってきます。岩手の阿部さんの「大津波」は東日本大震災による津波、見事に再生して花を香らせています。今年も皆さまの投稿を楽しみに拝見します。